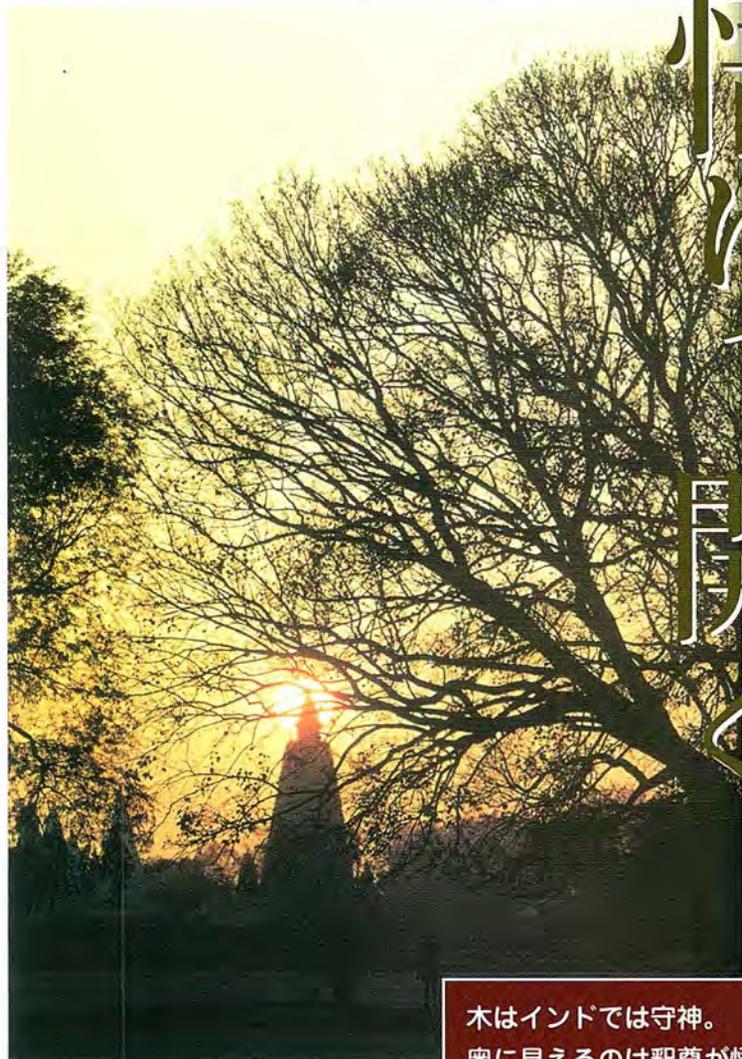


インド渡航歴40回超!

佐藤良純の No.5

インド・釈尊あれこれ紀行



悟りを開く

木はインドでは守神。
奥に見えるのは釈尊が悟りを開いたブッダガヤの大塔

王家の子供として何ひとつ不自由なことはない毎日を送っていた釈尊がなぜ出家の道を選んだのか、経典で一般的に知られているのが四門出遊^{よんもんしゅとう}。すなわち東西南北の門外に、老人、病人、死者、そして出家者を見て、世のほかなさを知り出家したというものだ。が、パーリー語経典にはこの話が無いので後に付加されたのである。さらにこの物語は、ヒンドゥー教にも同時代のジャイナ教の伝承にもないので仏教特有のものである。これとも一つ、王子時代の農耕祭で父である王と森へ一緒に行った時、たまたま小さい虫が大きい虫に食べられ、その大きい虫が鳥に食べられるところを見たという。まだ少年時代の釈尊だが、弱い物が食べられる道理に気づかされたのが出家の理由になっているとも言われる。

出家ののちブッダは他の修行者と同じように苦行に励んだ。苦行の原語は「タパス」で、タパスは熱を意味し、熱がエネルギーになると考えられていたことからきている。ブッダが苦行を行ったのはブッダガヤの郊外にあるプラグドリー（現ドンゲシュリ）の洞窟。窟の上に登ってみると遠くにはブッダガヤの町が見える。その手前に数個のストーパが見えるが、ガヤ空港に着陸する直前、真下に見えるストーパである。

しかし、ブッダは断食や不眠は悟りのためには役に立たないとしてやめてしまった。断食をやめたブッダは川で身を清め、村の娘スジャータの供養した牛乳入りのお粥をとって元気を回復する。現代でもお腹の具合が悪い時いただく、ケチュリと同じものである。

スジャータはかねて男の子が欲しく、樹神に願いをかけていたので、樹の下で瞑想にふけていたブッダを樹神と思い供養したものと思われる。スジャータはセーナ村に住んでいたが、その住んでいたところに記念のストーパが建てられ現存している。

ブッダの時代、六師外道と言われるヒンドゥー教以外の多くの修行者がいた。教え、修行方

ブツダが修行した洞窟へ入る
入り口は大きな石の左手奥



洞窟には釈尊の苦行像が祀られている

法が一番仏教に近かったのがジャイナ教で、開祖ジナの教えも活動範囲もほぼブツダと同じであった。ただし修行の方法はブツダより厳しく、最後は自殺を目標としていたらしい。ブツダが悟りを開いた後、ムチャリンダ竜王が7日間昼夜ブツダを雨風から守つたという。竜、すなわち蛇は恐ろしいが守り神として頼りにされていた。インドでは、樹木と蛇（竜のこと）が守神として崇拜されている。先のスジャータが祈願したのが樹神であったのはこうしたことによる。

佐藤良純

大正大学名誉教授

さとう りょうじゅん 昭和7年東京生まれ。大正大学、同大学院、インドデリー大学院に学ぶ。昭和34年より大正大学で教鞭をとり、教授、学科長を経て、平成14年退職、大正大学名誉教授となる。インドへの初渡航は昭和38年、以来インドへ訪れること、40有餘回。著書に「ブツダガヤ大菩提寺」、「釈尊の生涯」など多数。



苦行した洞窟の上に登るとブツダガヤの町の方に伸びる尾根がある。およそ30年前にこの尾根を佐藤良純師は縦走している。現在は木が生え、景色は一変している



今も苦行に励む修行者がたくさんいる